

ドゥンス・スコトゥス
『アリストテレス「命題論」第1巻問題集』第3問題 試訳

内山 真莉子／石田 隆太／小山田 圭一／本間 裕之

はじめに

本稿は、ヨハネス・ドゥンス・スコトゥスによる『アリストテレス「命題論」第1巻問題集』第3問題の試訳である。本稿の訳出した第3問題では、表示される事物に関して転変〔transmutatio〕が生じると、音声の表示において転変が生じるのかが問われている。

第3問題の構成は以下の通りである。第3問題では、対象となるアリストテレスの原文は第2問題と同じままで、当該の問題を提示することから始められている。その上で、事物において転変が生じると音声の表示において転変が生じることを主張する見解が1から4で提示される。これはスコトゥスにとっては異論に相当するものである。これに対して、5から9では、事物において転変が生じても音声の表示において転変が生じないことを主張する見解が反論として提示される。10では音声の表示において転変が生じないことがスコトゥス自身の見解として提示され、11から17では異論に対する解答が行われている。最後に、18ではこれまでの解答に対する再反論が提起されるが、19ですぐさま棄却されるに至る。以上のような構成をより容易に理解することができるように、〈異論〉および〈反論〉という区分けを訳文では便宜的に補足した。

なお、本稿は下訳をUとIが作成した上で訳者全員が検討を加えて作成したものである。また、第2問題の場合と同様に、【 】の部分は底本の編者によるものであることを断っておく(I)。

試訳

アリストテレス『命題論』第1巻問題集

第3問題

表示される事物に関して転変が生じると、音声の表示において転変が生じるのか否か。

表示される事物に関して転変が生じると、音声の表示において転変が生じるのか否

かが問われる。

〈異論〉

1. 音声の表示において転変が生じると思われる。

その理由は以下の通りである。ボエティウスは『区分について』¹で「事物が音声の基体ではない場合、音声は表示を行わないものである」と言う。そして音声は前に、事物があった時には表示するものであった。それゆえ、云々。

2. また、「実体的な転変において事物は名称と定義を手放す」²。それゆえ、転変した事物は、前に有していた名称を〔今は〕有していない。それゆえ、前に事物を表示していた名称は、今はその事物を表示しない。

3. また、アリストテレス『範疇論』³によれば、相関するものの一方が減びると、残る方も減びる。しかるに、表示するものと表示されるものは相関するものである。それゆえ、表示されるものである事物が減びると、事物を表示するものである限りでの音声が減びる。

4. また、知解されないものは表示されない。〔しかるに、〕非有は知解されない。それゆえ、非有は表示されない。大前提〔すなわち、知解されないものは表示されないということ〕の証明としては、表示することは知解することを前提するということが理由である。小前提〔すなわち、非有は知解されないということ〕の証明：すべての可知的なものは知性において形象を作る。〔しかるに、〕非有は作らない。それゆえ、云々。小前提〔すなわち、非有は知性における形象を作らないということ〕の証明：その理由は次の通りでもある。原因が減びると結果も減びる。〔しかるに、〕事物は形象の原因である。したがって、事物が減びると形象は減びる。その理由は次の通りでもある。表示されるものが減びると、表示するものが減びる。〔しかるに、〕

¹ ボエティウス『区分について』（Magee, p.44, ll.22-3）「実際、もし音声が表示するいかなる事物も基体ではないとするなら、その音声は指示するものであるとは言われない」（I）。

² アヴェロエス『天球の実体について』第1章（Junctas IX, f.3rb）；『アリストテレスの諸権威』（Hamesse, p.229, ll.34-6）「実体の諸々の個体において転変は二通りある。一つは、個体を名称と定義という点で転変させる実体的な転変であり、そうした転変は生成ないし消滅と言われる」（I）。

³ アリストテレス『範疇論』第7章 7b19-21（ALI.2, p.61, ll.6-7）「他方で、これら〔すなわち相関するもの〕は同時に相互を消去する。例えば、もし二倍のものがいないとするなら半分のものはないし、もし半分のものがいないとするなら二倍のものもない」；『アリストテレスの諸権威』（Hamesse, p.303, ll.100-1）「関係しているものは、自分が措定されると〔もう一方を〕措定し自分が滅ぼされると〔もう一方を〕滅ぼすというような仕方に関わっている」（I）。

事物も表示されるものである。それゆえ、事物が減びると、形象が減びる。

〈反論〉

5. 以上に反対する。『範疇論』の「実体について」という章⁴でアリストテレスは、同じ言表が時には真であり時には偽であると言う。したがって、時には真である時には偽である言表の言葉は同じものを表示する。しかしながら、言葉そのものによって表示される事物には転変がある。それは、座っていることに関して転変が生じたり生じなかったりする場合に⁵、ある時には真でありある時には偽である「ソクラテスは座っている」〔Socrates sedet〕という言表について明らかな通りである。それゆえ、事物において変化が生じて、表示において変化は生じない。

6. また、眠っていることや走っていることなどのように、時には存在し時には存在しないような行為が多くある。それゆえ、もしそうしたことを表示する音声は、そうしたことにおける変化のゆえに変化したとするなら、そうしたことに付与された音声は、表示しないものになってしまったり再び表示するものになってしまったりすることが何度もあるだろう。そしてその帰結として、そうした音声は何度も付与されるものでなければならない。

7. また、誰も走らなくても、「誰かが走っている」〔aliquis currit〕という命題は偽であることになってしまう。なぜなら、「走っていること」〔currere〕は、走ることが存在する時に「走っていること」という名称が表示していたことを表示しないからである。

8. また、表示される事物が存在する時や存在しない時にわれわれによって発話される音声は同じ知解を定めていたということは語るといふことのあり方から明白である。さもないと、ソクラテスが非存在の場合に「ソクラテスは存在する」〔Socrates est〕という命題が偽であるとわれわれは言わないであろう。それゆえ、「表示することは知解を定めることである」〔significare est intellectum constituere〕⁶のだから、音声

⁴ アリストテレス『範疇論』第5章 4a36-b1 (AL I.2, p.53, ll. 11.24-6)「すなわち、誰かが座っているという点において言表は同じまま存続するのに対して、事物は動かされるものであるがゆえに、その言表はたしかにある時は真になりある時は偽になる」(I)。

⁵ L写本の読みに従って、《quia》を削除して読むことにする (I)。

⁶ アリストテレス『命題論』第3章 16b19-21 (AL II.1, p.7, ll.14-6)「実際、それ自体で言われた動詞そのものは名詞であり何かを表示する。というのも、[動詞を]言う者は知解を定め、[動詞を]聴く者は[知解の対象において]静止するからである」。Cf. 『アリストテレスの諸権威』(Hamesse, p.305, ll.36)「表示することは知解を定めることである」(I)。

によって同じものが表示される。

9. また、アリストテレス『分析論後書』第2巻⁷によれば：非有を知解し表示することはありうる。それゆえ、事物の非有性〔non-entitas〕は表示を行う音声によって表示されるものの非有性をもたらさない。

【I. 問題に対して】

10. 問題に対しては以下のように言われる。存在する限りでの事物において転変が生じて、音声の表示において転変は生じない。そのことの理由は次のように措定される：存在する限りでの事物ではなくて、知解される限りでの事物ないし可知的形象がそれに属する限りでの事物が表示される。しかるに、どちらであるにせよ、同じ形象を通じて事物の本質をわれわれは認識する——そして、アリストテレス『分析論後書』第1巻⁸によれば：「しばしば存在するものについて」〔de his quae frequenter sunt〕それが存在しない時でも「われわれは論証を有することができる」〔possumus habere demonstrationem〕のであり、その帰結として、存在する時と同様に存在しない時に同じ知をわれわれは有することができるのであるからして、事物が存在する時、また存在しない時にその事物について同じ知をわれわれは有する——がゆえに、存在する限りでの事物において転変が生じて、形象も知解される限りでの事物も転変しないものそのまま留まるのだから、それゆえ、名称ないし音声によって表示される限りでの事物は、存在する限りでの事物においてどのような転変が生じるとしても転変しないということが帰結する。そこからの帰結として、音声も表示において転変しないことになる。

【II. 主要な議論に対して】

⁷ アリストテレス『分析論後書』第2巻第7章 92b5-7 (AL IV.1, p.78, l.20 - p.79, l.2) 「実際、存在しないものが何であるかということを誰も知らないが、私が山羊鹿と言う場合、たしかに理拠や名称が何かを表示する一方で、山羊鹿が何であるかを知ることは不可能である」(I)。

⁸ アリストテレス『分析論後書』第1巻第30章 87b22-6 (AL IV.1, p.61, ll.21-5) 「実際、すべての三段論法は、必然的な命題かしばしばそうあるものとしての命題であるものを通じてある。そしてもしたしかに命題が必然的であるなら、結論も必然的であるのに対して、もし命題がしばしばそうあるものとしてのものであるとするなら、結論もしばしばそうなるものである」。Cf. ロバート・グロステスト『アリストテレス「分析論後書」註解』第1巻第18章 (Rossi, p.265, ll.126-7) 「さて、すべての論証は常に存在する事物かしばしば存在する事物に関わる」(I)。

11. 第一の権威 [である 1] に対して：ポエティウスの原文は次のようなものである：「もし音声が表示するいかなる事物も基体ではないとするなら、その音声は表示するものとは言われぬ」〔*Si nulla sit res subiecta quam significat vox, significativa esse non dicitur*〕。ここで《est》[すなわち *si* 節の中の *sit* のこと] は、「もしいかなる事物も音声によって表示されていないとするなら」〔*si nulla res sit significata per vocem*〕云々のように、二番目ではなくて三番目の隣接語として述語付けられている。また、そこで《res》は、存在するものとしてのみならず、知解される限りでの事物としても知解されている。[つまり、]「もし何も音声によって表示されないとするなら、音声は表示を行うものとは言われぬ」〔*si nihil significetur per vocem, vox non dicitur significativa*〕とポエティウスは言っているようであろう。

12. 第二の権威 [である 2] に対して：この権威の理解は次のようなものであるかもしれない：個物〔*res singularis*〕の実体的な転変——それにおいてはすなわち実体形相が捨て去られる——において、転変した個物は種の名称と定義を手放す。なぜなら、その個物は前に存在していた種の内に留まらないからである。[しかし、]「それゆえ、種の名称は自らによって表示されるものを手放す」〔*Ergo nomen speciei amittit suum significatum*〕ということは帰結しない。その理由は次の通りである。種の名称はいかなる代示対象も表示していなかった。また、個体の名称も、それが個体に対して固有に付与されたものである限りでは、自らによって固有に表示されるものを手放さないのであって、種の形相から転変したものだけが前に存在していた種の名称を手放す。

13. 第三の論拠 [である 3] に対して：表示されるものが滅びると表示するものが滅びるということは是認されるべきである。しかし、存在する限りでの事物が滅びても、しかしながら、知解される限りでの事物は滅びない。それゆえ、音声によって表示されるものも滅びない。

14. 別の論拠 [である 4] に対して：主要な大前提 [すなわち、知解されないものは表示されないということ] は否定されうる。[その大前提の] 証明に対して：表示することが知解することを前提するのは、すべての表示されるものが前に知解されていたという仕方によってである。さもなければ、表示されるものには音声は付与されていなかったであろう。しかし、音声が付与された後では、それに対して音声が付与されているものを——それが誰にも知解されなくても——、すべての表示されるものが前に知解されていたという仕方によって、音声は表示することができる。

15. さらに、[4の]小前提[すなわち、非有は知解されないということ]に対してそれが偽であると言われうる。なぜなら、アリストテレス『分析論後書』第2巻⁹によれば、非有を知解することはありうるからである。その小前提の証明に対して：その小前提の証明の大前提[すなわち、すべての可知的なものは知性における形象を作るといふこと]は、知性の第一の対象について以外の他のすべてのものに関して偽である。さらに、その証明の小前提[すなわち、非有は知性における形象を作らないということ]も、もし陳述が非存在のものについてなされていると理解されるとするならば、否定されうる。なぜなら、非存在のものは、知性において[今]作っている形象ではなくて[前に]作っていた形象を通じて——その形象は前のものと同じものそのまま留まることができるがゆえに——知解されうるからである。

16. 「原因が減びると」[*destructa causa*]云々のゆえに非有は知性における形象を作らないということが示される際[すなわち、4の主要な小前提に対する証明の小前提に対する証明の一つ目]には、原因が減びると結果も減びるといふ命題は、存在における原因[*causa in esse*]に関してのみ理解されるべきであって、生成における原因[*causa in fieri*]に関してではない。ところで、存在するものである限りでの事物は、生成における形象の原因[*causa speciei in fieri*]であるのみである。

17. 第二に、「表示されるものが減びると、表示するものが減びる」[*destructo significato, destruitur signum*]ということが示される際[すなわち、4の主要な小前提に対する証明の小前提に対する証明の二つ目]には、私は以下のように言う。存在する限りでの事物ではなくて知解される限りでの事物が、魂における可知的形象を通じて表示されるものである。そしてこのようなあり方では、表示されるものは減びない。

【III. 或る反論と解決】

18. 問題の解決に反対する：もし音声、事物が存在しても非存在であっても同じものを表示するとするならば、その場合、音声によって表示されるものは同じものである。[この場合の]帰結が明らかであるのは、能動態の真なる命題は受動態の真なる命題に変容しうるからである。そしてさらに、前は存在する事物が表示されていたが、今は非存在の事物が表示されている。それゆえ、非存在のものと存在するものと同じ

⁹ 註7を見よ (I)。

であるが、これは偽である。

19. 18 に対して解答は容易である：その理由は以下の通りである。なぜなら、存在する事物が音声によって前に表示されていたのでも、非存在の事物が今は表示されているのでもなくて、知解される限りでの事物——表示される限りでは、その事物にとって存在することと非存在であることは外的なことである——が表示されているからである。

(うちやま・まりこ 慶應義塾大学大学院文学研究科在学)

(いしだ・りゅうた 筑波大学大学院人文社会科学研究科在学/
日本学術振興会特別研究員)

(おやまだ・けいいち 東京工業大学非常勤講師)

(ほんま・ひろゆき 東京大学大学院人文社会系研究科在学)

※本稿は、JSPS 科研費 15J00085 (石田) の助成を受けたものである。